



大谷石の魅力を全国のみなさんへお伝えする大谷石研究会の広報誌

ワグナー・ナンドールアートギャラリー調査報告

NPO法人大谷石研究会 理事 遠藤康一（宇都宮大学地域デザイン科学部建築都市デザイン学科講師）

益子町の中心部、城内坂からほど近い丘陵地に、ハンガリー出身の彫刻家が築いた、創作と暮らし、作品展示のためのランドスケープが広がります。ワグナー・ナンドール氏（1922ー1997）は、第二次世界大戦後のハンガリー動乱の中心人物として追われ、スウェーデンに亡命、そこで出会った秋山千代氏と共に1969年に来日し、1970年より益子に住居とアトリエを構え生涯同地にて創作活動を行った芸術家です。現在、ワグナー・ナンドールアートギャラリーと名付けられた庭園には、移住当初から晩年までに築かれたナンドール氏の設計と夫妻のセルフビルドによる建築群が点在し、鉄骨造のアトリエ、大谷石の独特な積石造の図書館 展示室など、地形に富んだ環境の中で互いに、また屋外の彫刻作品と有機的に関係づいた文化的景観が形成されています。氏の建築的な表現活動が集約されたこの環境には、創作活動と並行した長期間にわたるひとりの芸術家の環境形成の足跡に加えて、個々の建物における独自性の高い構法や空間構成などの特徴を見ることが出来ます。

そこで、大谷石研究会と宇都宮大学遠藤研究室は、同ギャラリーを運営する（公財）ワグナー・ナンドール記念財団のご理解をいただき、2023年度に予備調査、2024年度より建物群の調査、および建築図面、ドローイング、写真等の建築資料に関する合同調査を開始し、継続的に活動を行っています。また現在、財団には氏が残した断片的な建築資料が保管されているものの、個々の建築図面が完備されていないため、調査から建物図面を作成し、今後の環境整備における基礎資料として活用されることも想定しています。

2024年度は、建物のレベル調査、3棟の実測調査を実施しました。ここまでの調査の経過の一部を中間報告として、以下に述べさせていただきます。

・**傾斜地である敷地と建物の位置関係を把握するために、測量士である研究会理事の佐藤氏の指導の下、建物のレベル調査を行いました。約8mの高低差がある北向きの斜面全体におよそ13棟の建物が複合しつづ点状化する状況を確認しました。**

・**傾斜地である敷地と建物の位置関係を把握するために、測量士である研究会理事の佐藤氏の指導の下、建物のレベル調査を行いました。約8mの高低差がある北向きの斜面全体におよそ13棟の建物が複合しつづ点状化する状況を確認しました。**

・**傾斜地である敷地と建物の位置関係を把握するために、測量士である研究会理事の佐藤氏の指導の下、建物のレベル調査を行いました。約8mの高低差がある北向きの斜面全体におよそ13棟の建物が複合しつづ点状化する状況を確認しました。**

1970年代に建設された初期の建物群が位置しています。今回調査を行ったアトリエ棟（1970年）は、ナンドール夫妻が益子に移り住んで間もなく、生活空間より優先して自ら建設されたもので、彫刻作品の創作拠点として、また敷地全体の環境構築の基点として、特に主要な建物といえます。北斜面に直行して鉄骨造の建物が置かれ、内部中央の大空間（約8m四方、高さ約7m）には、北側上部の大開口（プロフィット・ガラス）から柔らかく均質な光が降り注ぐ、創作のための安定した室内環境が実現されています。また南北に組み込まれた2層の居室部と共に、全体として斜面に沿ったスキップフロアの構成となっており、施工性と経済性、環境との調和が図られた合理的なデザインの特徴が捉えられました。

今回調査を行った建物の他にも、ギャラリーには、大谷石を用いた構法、氏の創作との関わりを示唆する意匠が特徴的な建物等が、彫刻、自然と融合した環境を形成しています。今後も引き続き調査を進め、改めて報告の機会を持ければ幸いに思います。



（写真：乾 剛）



（写真：乾 剛）

同ギャラリーは、年2回の企画展期間に公開されています。詳しくはHPでご確認ください

「哲学の庭」から道具小屋方向を望む

レベル調査時の集合写真

道具小屋

アトリエ内部

学生寮・図書室外観